

## 編集室から

コラムにも書きましたが、五月中旬から連日の日本列島縦断出張が続きました。その間に出張がなかった一週間。実は、寝込んでいました。未だ肌寒い北海道から戻ったまま、名古屋・東京を経て那覇へ。真夏のような沖縄では出逢いの数々も熱く、交流は夜更けまで。

戻ってくると北陸は例年に無く冷え込みが続いていて、その気温差に戸惑いました。単身赴任先の金沢に戻る予定でしたが、何か予感がしたのでしょうか。急遽、能登の自宅に。

その翌日から激しい悪寒と腹痛に襲われ、寝れぬ夜を過ごすこととなります。数日間、食欲も無く、完全絶食や、僅かなお粥1杯で終わる日が続き、ひたすら床に就いたままでした。

出張に赴く前から声が出にくくなっていましたので、気温差やホテルの空調での乾燥などにより、体調のコントロールが巧く行かなくなったのでしょうか。ところが週末には、北東北への出張が待っています。それまでに何としてでも復調しなければと、そればかり考えていました。その間に迎えた五十歳の誕生日は、勿論ノンアルコールでお粥。恐らく忘れない日となるでしょう。

ようやく起き上がって普通の食事を摂り始めた日、体重を量ると3Kg以上も落ちていました。その翌日、北東北に。ご当地は初めてでしたが、リハビリのつもりで気ままに街歩きをした処、何故か龍神様にご縁のある寺社ばかりに遭遇。それはもう、お導きではないかと思えるほどでした。

こちらでのお仕事も何とか無事終えた帰途。今回の体調不良は、何かの好転反応だったのではないかと感じていました。

六月にはまた、九州から札幌に飛ぶ機会が待っています。皆様もお体にはくれぐれもお気をつけくださいませ。(は)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2010/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2010/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 水意月



山形県かみのやまにて  
by hama

## 寄稿 『農家に元気を与えるツアー』

能登乃國ゆするぎ塾 塾長 大湯章吉

二〇〇六年から七尾市・中能登町で農家ビジネスツアーを実施している。アメリカの富裕層が能登の農家を訪問するツアーである。

米国コネチカット州TAUCK社とJTBBが、「TAUCK ESSENCE OF JAPAN」として共同企画したものである。箱根、高山、金沢、京都を巡る十日間のプログラムの中に農家訪問を取り入れ、能登乃國ゆするぎ塾が現地コーディネーターを担っている。四月から十月まで二十五ツアー、延べ九百人を稲作経営三農家、三農業関係団体で受け入れている。

このツアーの魅力は、農家と対話しながら、情報誌に掲載されていない「風土や農業へのこだわり」を知ることができることである。セスナで種まきをし、二階建てぐらいのコンバインで刈り取るアメリカ人に、日本の農村風景が興味を惹くのだ。ただ物珍しさだけでなく、ちゃんと勉強もしてきている。例えば、水管理をスプリンクラーで行なうアメリカ人にとっては「水はどこからくるの？水田の水が枯れないのはどうしてか？」など、日本の農家にとって当たり前のことが不思議で新鮮に映り質問責めである。手刈りや「はさ掛け」のことも知っている。体験したうんちくを自国へ持って帰りたいのだ。だから、質問に正確に答えることがで

## 濱のつばやき 『地の力』

このひと月ほど全国各地を巡らせていただいた事は無いと思う。五月中旬には、北海道新冠。翌週は沖縄。一週間あけて、岩手県二戸市浄法寺。

いずれの地でも素晴らしい出逢いと、旧交を温める場席を設けて頂き、有り難かった。

この間のお話は、本欄を楽しみにしておられる皆様にご報告差し上げたい事が多すぎて、未だ整理がつかない。

今年は例年になく春先から寒冷で各地の桜が長続きした。ハイセイコーなど名馬を産した北海道日高地方の新冠を訪れた時、丁度満開を迎えた。街づくりの志高い有志が組んだツアーには、ホーストレッキングがあった。かつての賞金王たちの背に跨り、雑木林をゆつくりと揺られてゆく。蝦夷鹿たちも馬なら怖がらず、直ぐそばで出逢っても逃げようとしめない。こんなにも癒されるものかと、感動した。馬を模ったツアー特製のランチ、引退したばかりの名馬を間近に眺める。門外漢の自分でも和むが、競馬ファンなら、痺れること間違いはない。



翌週訪れた沖縄は、暑かった。気温ばかりではない。相変わらず人々も、懐かしい面々にもお会いできた。ヤンバルの聖地である岩山に登らせていただいた

きる事が、このツアーの生命線でもある。地域にはいいもの、手間隙かけた物語がある。当初、当たり前すぎて地元では評価できないが、外から認められると自覚する。いいものを発見する姿勢を持ち続けることが大切なのだ。

ツアーを通じて、ありのままの姿が商品になり農家の収入に繋がっている。しかも、この企画が旅行プログラム全体のアクセントとして外せない位置付けになっている。また、TAUCK、JTBB、農家、能登乃國ゆするぎ塾の絶妙な連携と役割分担が明確で、Win Winの関係が確立されていることも継続に繋がっている。

このツアーの実践から、身の回りのあらゆるものに対して「少し手を加える」「見方を変える」「試してみる」ことで商品になることを実証できた。農家にとつても「アメリカ人が視察する米作り」としてPR効果と自信のなるのが大きい。過疎や後継者不足で苦悩する集落や農家に元気を与え、新たな活性化に役立つことを目指している。



【プロフィール】  
（おおゆ あきよし）  
一九五三年中能登町生まれ。農業。町職員、町議会議員を経て現在、いしかわ地域づくり協会運営委員長。また、地域づくり団体全国協議会幹事として地元と全国を橋渡す。  
自称・町の添乗員

たことは、沖縄の大切なものをシェアさせていただき、それを許していただいたことが有り難く光栄だった。新しい方々とも親しく交流させていただいた。沖縄滞在での濃密な時間は、全ての世話を当たり前のようにしてくれた島田さんご夫妻の存在なくして語れない。

一週置いて訪れた岩手県旧浄法寺（二戸市）。標高約千メートルの稲庭岳頂上からは、岩手山を始め、遠く八甲田山に至るまで北東北の名峰が一望できた。溢れ出る名水「岩誦坊」の美味しいこと。そして、この地で土とともに生きる人々の底力に触れた。



各地、いずれも雲ひとつ無いほどの快晴に恵まれた。ささやかではあるが、紙面を借りて地元でお世話になった行政・関係機関・地元の方々に、改めて心から御礼を申し上げたい。そしてまた、日本にはまだまだ素晴らしい処があり、各地で地元のために奮闘している方々が少なくないことを改めて思い知らされた。地域づくりのお手伝いをさせていただく我が身には、一層身の引き締まる思いがする。

新冠で作ったガラスのトンボ球は、手元の携帯にぶら下がっている。

盛岡市紺屋町は、南部藩の城下町盛岡にあって中心部を流れる中津川左岸に位置し、旧奥州街道の通り道で商人町として栄えた場所である。

私事で恐縮であるが盛岡市には子どもの頃から何度も行きながら、紺屋町界隈に実質的に踏み込んだのは今年2月がはじめてであった。盛岡に行くと、盛岡駅から北上川にかかる開運橋を渡り、中心商店街である大通商店街、盛岡城跡、そして中津川を渡り、中ノ橋・肴町商店街までがメインルートであった。出張で宿泊、一杯飲むのも盛岡駅前や大通商店街界隈が多かった。筆者は学生時代に中心商店街研究から始めており、もう使わない言葉であるが「近代的なアーケード」がかかっているような商店街を優先して見ていたように思う。

さて、紺屋町界隈に現存する建築物を紹介する。写真上の正食普及会(旧井弥商店、明治末期建築、盛岡市保存建造物)は、黒漆喰の土蔵造りの家で呉服問屋であったものである。写真下の紺屋町番屋(大正2年建築、盛岡市保存建造物)は、盛岡市の第五分団の番屋として使用されていた。望楼が特徴的な大正期の木造洋風建築である。その他、白壁と貼り瓦、格子戸の低い軒が続く商家の「ござ丸」、昭和2年に昭和初期のモダンな表現とデザインの旧盛岡貯蓄銀行である「盛岡信用金庫本店」などがいまに残っている。

そして酒蔵、南部せんべいの店、染物の店や、一步、足を延ばせば、わんこそばの老舗もあるなど、盛岡の食、工芸なども楽しめる。また、昭和59年から4~11月の第3日曜日に紺屋町アンチック市がたち、古着や骨董品などを扱う出店が30店ほど並ぶ。まち歩きとしてもおもしろい場所となっている。紺屋町へのアクセスであるが、バス交通も盛岡駅発着の盛岡市都心循環バス(でんでんむし)右廻りを利用して10分ほどで最寄の複数のバス停から徒歩2、3分程度である。

しかし、この地域もマンション立地や、駐車場化が進んでおり、まちなみが壊れてきている。また、城下町時代からの狭隘な道路にかかわらず非常に交通量の多いところであり、歩くにしても自転車に乗るにしても安心して回れない。先にあげた点としての建築物は残されていくとしても、周辺のまちなみを保全や整備が課題である。

盛岡市街地の観光客入り込み数は、平成12年が298万人、平成18年が347万人と16.4%の増加となっている(盛岡市中心市街地活性化基本計画概要版、平成20年7月、盛岡市)。先に紹介した盛岡市都心循環バスも利用者が増加傾向にあるなど、東北地方の県庁所在地では賑わいが保たれているといわれている。本稿は紺屋町の紹介のみであったが、盛岡市の中心市街地は歴史、文化資源等が豊富であり、今後の「街なか観光」の動きに注目していきたい。



## 相続について21

### 相続税を物納できる場合

今回のケースは、相続した財産が多額で相続税の支払いが困難なケースです。

#### Case Study

岩崎さん(仮名)は、父親が所有していた土地を相続しました。岩崎さんが相続した土地は、近年区画整理事業が入り、20年前と比べて100倍近い値上がりをしていました。

現預金などは全くと言っていい程無く、相続税は土地を売ったお金で払うしかなくなったのですが、折からの不況で思うように土地が売れず困ってしまいました。

そこで、所有している土地を物納によって相続税を納付しようと考えました。

#### Answer

今回のケースのように、相続税が申告期間内に支払うことが困難で、現金で納付する代わりに不動産や有価証券で税金を納める「物納」という制度によって納付することができますが、下記の条件を満たすものに限定されます。

#### 物納するための条件

1. 相続税の納付期限までに物納申請書を提出すること。
  2. 延納によっても、相続税を金銭で納めることに困難な事由があること。
- こうした事由があるかどうかの判定は、退職金の給付や貸付金の返還など、納税者の近い将来の収入を考慮したうえで審査されます。また物納できるのは、金銭で収めることが困難な部分の金額に制限されます。

#### 物納できる財産とその優先順序

相続税を物納する事情が認められたとしても、どのような財産でも物納できるわけではありません。

#### 物納の対象

1. 相続または贈与によって取得した財産。
  2. 日本国内に存する財産のみ。
- 相続が発生する以前から、相続人が所有していた財産は物納できません。
- #### 物納できる財産
1. 国債・地方債
  2. 不動産・船舶
  3. 社債・株式・信託などの受益証券
  4. 動産
- そして物納する優先順序もこのような順番になります。

たとえば、不動産を持っているのに株式や社債、まして動産などで物納するということは認められません。ただし不動産といっても、現に相続人が住んでいる家屋しかなく、この財産を物納してしまうと生活に支障をきたす、といった場合は例外です。

また、不動産でも袋地になっていたりなど、通常売却するのに困難な土地を物納して、角地など売却しやすいような土地を手元に残す、というようなことも認められません。

先月下旬、由布院に結婚式に参列するために出向いた。14年前の4月、由布院駅前にあった「由布院観光総合事務所」に一人の青年が来た。井尾淳君という。地元で100年近く続く酒屋の次男坊だ。最も、100年も前から酒屋ではなく、かつては呉服屋で、ムラの暮らしに必要なものを小売し、その名も「井尾百貨店」と言う看板を上げている。

新卒の彼を当時事務局長であった小生が静岡県職員としての経験のみで少々鍛えた。その後、旅館青年部の連中と由布院の観光まちづくりに邁進することになった。そして、ニセコ町に出向し日本初の株式会社観光協会の立上げに尽力した。由布院に戻ってきた後はいつまでも観光協会の職員でいたのでは個人的成長がないと、「桐屋」という九州の緑茶にこだわった日本茶の喫茶を始めた。緑茶の確かな味もさることながら彼のかっこいいお茶のいれ方に惚れてくるお客も多かった。でも、10席に満たない喫茶で、人を雇用して生活基盤をつくるほどの利益を上げることは容易ではない。

次のステップとして「市の坐」という豆腐料理店を始めることにした。富山の豪雪地帯にある古民家を移築し、お店に見事に変えた。世界に紹介される旅館である山荘無量塔(むらた)の藤林さんの力添えもあって、空間・料理ともにハイレベルにある。由布院にお越しの折には是非お寄りいただきたい店だ。



これまで仕事に夢中に取組んできた井尾君がいよいよ結婚することになったのだ。

この結婚式の時に、同じテーブルにいた私の後任の事務局長の米田さんが今年の観光協会の総会を最後に辞任すると言った。

「ほ、本気かい?」「12年勤めることになったけど、本当は8年目

ぐらいに辞めようと思った。けど、合併問題や国民宿舎の指定管理者になったりで、その期を逸していた。」「うーん!」唸りつつも、中間支援的組織の非営利団体事務局長は同じ人が永くすべきではないと思っているので、むしろ賛成だった。ついにその時が来た、でも東京都庁を辞めてきているので戻る先はない。氏曰く熊本大学に社会人入学し、博士論文を仕上げるのみ決めていたという。地元では戻ってきて「まちづくり会社」を興してもらい、そこに観光協会から委託事業を出すし、もちろん由布院での経験やネットワークを活かし全国のまちづくりの仕事をして欲しいというのが、皆の希望だ。

小生が深く関わった全国公募で名を馳せた伊豆稲取温泉観光協会事務局長の渡邊法子さんも、今年3月で任期2年+1年で辞任された。「着地型旅行商品の開発・販売・運営のシステムはできた、あとは地元の皆様で」と役割終了の宣言をして去っていった。そして、オファーのあった京都府京丹後市観光協会の事務局長に4月に就任した。

鮮度が人のモチベーションをあげ、そのエネルギーが地域に大きく刺激を与えていくのである。「地域に根付く非営利団体組織の人事異動できると変わるんだけどなー」と常に思っているけどなかなか事例が出てこない。小生が力を入れている伊豆で叶えられるといいのだが。

#### 編集者注

溝口さんが本文中で紹介されました豆腐料理店「市の坐」の情報は次の通りです。

由布院 市ノ坐 (ゆふいん いちのざ) 0977-28-8113

大分県由布市由布院町川南113-12 JR由布院駅から631m徒歩10分

営業時間: 11:00 ~ 14:30(L.O.)、17:00 ~ 22:30(L.O.)

水曜日定休

<http://ichinoza.jugem.jp/>